016 元田肇 代言人から政界へ

出身地　大分県国東市
生　年　一八五八（安政五）年一月十五日
没　年　一九三八（昭和十三）年十月一日

創立者の中で、親子二代で代言人業務や法学教育に携わったのは元田肇（もとだはじめ）一人である。

元田肇は現在の大分県国東市の出身、猪俣栄造、理寿（りす）の末子に生まれ、政左衛門、のち政吉と称した。杵築藩の学監元田竹渓（ちくけい）に師事し、その子・直（なおし）に才能を見いだされ、一八七一（明治四）年、上京、元田直の養子となり、肇と改名した。翌年開拓使学校に入学するが、同校が廃止となり、七四年開成学校の貸費生となる。八〇年東京大学法学部を卒業、法学士となり、代言人の免許を受けた。

義父となる直は太政官大史として勤めたのち、七五年に法律学舎を創立して法律学を教授、代言業務を合わせて行った。この学舎は法律学校の元祖で、初期の有力代言人の中に出身者が多かった。まもなく代言業務に専念し、自身も代言免許を受け大事件を依頼する者が多かったという。八〇年、初代の東京代言人組合会長に選出され、代言人の地位向上に尽力した。同年、直が長崎上等裁判所判事に任じられ、大学を卒業して代言人となったばかりの肇が義父の代言事務を引き継ぐことになった。肇は翌年に銀座に代言事務所を開設、直の娘キク子と結婚している。八四年、東京代言人組合会長に就任、翌年も再選されている。

このような中で元田肇は英吉利法律学校の創設に参加し、第一年級の動産委託法、第三年級の法律抵触論の講義を担当した。政界への進出にともない、教壇からは離れ、明治末年には弁護士登録も名前のみになっていくが、その後も大学との関係は継続していく。英吉利法律学校の維持員、社団法人東京法学院大学社員、財団法人中央大学評議員などとして、大学の経営に参画していた。また、一九一〇年の創立二十五周年に際しては記念会委員長として重責を果たした。二八（昭和三）年には、中橋徳五郎・藤田隆三郎・花井卓蔵とともに中央大学顧問に就任、三八年十月八十一歳で亡くなるまでその任にあった。

一八九〇年第一回衆議院議員選挙に元田は豊州会に所属して、大分県一区および五区から立候補し、両区で当選を果たした。次回の選挙では落選するが、補欠選挙で復活し、以後一九三〇年まで長期にわたって議員の座を守り、政友会でも重鎮となっていく。一八九八年には衆議院副議長、一九一一年には拓殖局総裁、一三年には初めて山本権兵衛内閣の逓信大臣に就任した。同内閣では奥田義人が文部大臣、司法大臣を務めている。二〇年には初代の鉄道大臣に、二八年には衆議院議長に就任した。三二年に政党人として初めて枢密顧問官に任じられ、三七年には老齢につき宮中杖を許される。

元田肇

一八八九年に英吉利法律学校を卒業し、弁護士、判事となった大橋樹太郎は元田について、弁護士全盛期に最も親交のあった同僚として山田喜之助、代言人組合会長の競争者として大谷木備一郎、訴訟における好敵手として岡山兼吉の名をそれぞれ挙げている。いずれも英吉利法律学校の創立者やそれに準じる関係者であり、興味深い。

現在、多摩校舎一号館には元田肇胸像が置かれている。戦時中元田家から大学へ預けられていた渡辺長男作（おさお）の胸像が学生紛争のさなかに壊され、陶製の銘板のみが残されていたという事情があり、本学の創立百周年を機に平野富山により復元したものである。

出典：『タイムトラベル中大125:1885→2010』第2版。一部修正を施している場合があります。